

個々の人たちが自らの精神的・身体的悩みをもって、精神科医療の介入を希望したり、あるいはその介入を必要としたりする場合、その精神科的介入はその個々人との面接からはじまるということは、当然なこととはいえ、決して蔑ろにしてはならない事柄である。この過程を面接とか診察あるいは面談・相談とかいろいろな名づけ方があるにしても、精神科的介入を行う人とそれを受ける人との出会いがまずは存在しないと精神科的医療がスタートしないということはいくら強調してもしすぎることはない。

「患者さんの診察抜きには医療は存在しえない」と言われるゆえんである。その知識と技法を教えるのが、一般科でいえば内科診断学、精神科の場合は、しばしば精神科的診断学、あるいは精神科的面接法と称される領域である。精神科的面接は、精神医学にとって基本的な事項に属するだけに、あらゆる精神医学教科書では必ず記述される項目であり、また、その面接法についての著書や論考は古今東西きわめて数多くみられる。そのなかでも、保崎論文は、土居健郎や原田憲一の著作とともに、よく知られたものである。

保崎は、本論考と相前後して、著書『心の病気とは何か』を著し、そのなかで、「精神医学における面接の意味」を独立して章立てし、面接と疎通性、心のなかの表われ方（症状）、異常かどうかの判断、時代の変遷が精神疾患に与える影響、家族からみた「おかしさ」、病識、精神障害のきっかけ等を論じているが、本論考はそのなかでの面接と疎通性に関してより詳細に論じたものとみなされるであろう。保崎はその章立てにも明らかなように、精神科的面接を非常に重要視する立場にたつ。本論考や上記の著書は、精神医学的面接を考えるうえで必読の内容としてよいだろう。

精神科的面接は、内科診断学に代表される一般科における診察とはまったく異なった特性をもつ面接法であると思われるが、解説者は、その特性として、1) 面接は、診察者（医師）と被診察者（患者）との出会いからはじまって、相互のあいだに成立する心的交流に至るまでの過程である、2) この過程において、治療にとって意味のある、いわゆる医師-患者関係が成立する、3) 面接という過程において基本的に重要なのは、相互の言葉でのやりとりであるが、それだけでなく、仕草や身振り、表情、声調などの非言語的交流も大きな役割をもつ、4) 面接は、医師、患者がそれぞれ相手の人格や性格、考え、感情の動きなどを、客観的に、冷静に、場合によっては、冷酷に、観察する場であり、診察者が被診察者自身にとって役に立つ人間であるのかどうかを判断する場でもある、5) 面接自体が、当初より、治療的な意味をもつ。面接は、精神科的治療の根幹であるといってもよい、といったことを考えているが、保崎もまた、同様なことを論考において指摘しているように思われる。

（松下正明）